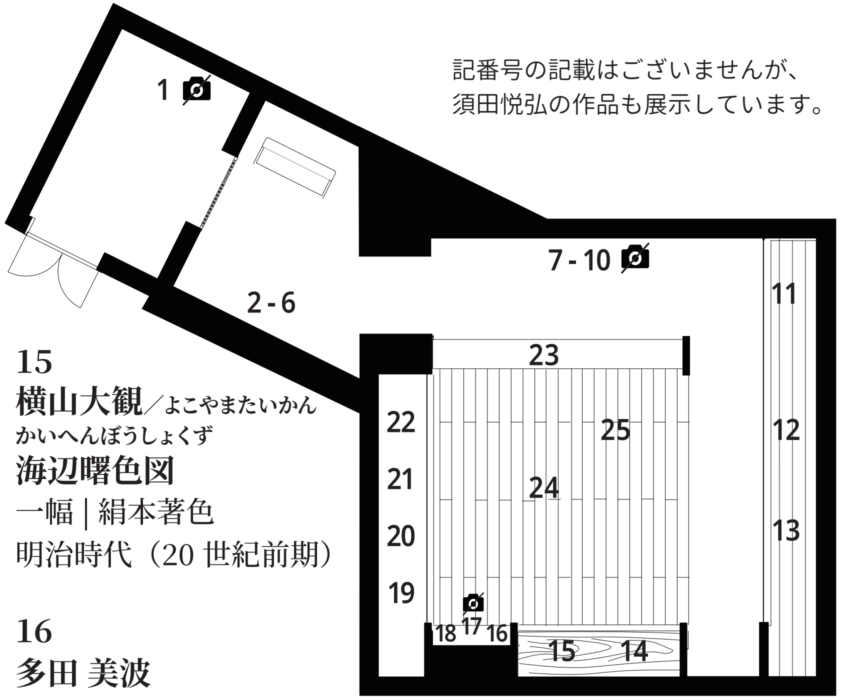
HARA MUSEUM ARC　特別展示室 觀海庵

青空は、太陽の反対側にある 原美術館／原六郎コレクション

【秋冬季|前期】2023年9月9日[土]─11月8日[水]

記番号の記載はございませんが、
須田悦弘の作品も展示しています。



出品作品

撮影 NG マークの作品をのぞき、写真撮影が可能です。

1（撮影 NG）
アニッシュ カプーア
虚空
顔料、ファイバーグラス
1992 年
128 x 97 x 92.5 cm

2 - 6
奈良 美智
Mirror
(In the Floating World)
Ocean Child
(In the Floating World)
Full Moon Night
(In the Floating World)
Cup Kid
(In the Floating World)
No Fun!
(In the Floating World)
再加工した木版、ゼロックスプリント
1999 年
各 41.5 x 29.5 cm (29.5 x 41.5 cm)

7 - 10 *（撮影 NG）
クリスト
アブダビでのマスタバ建設のプロジェクト
紙、フォトスタットに鉛筆、木炭、パステル
1981 年
81x 59.2 cm

包まれた遊歩道、東京、上野公園のプロジェクト
鉛筆、布、木炭、クレヨン、地図、写真
1969 年
71 x 56 cm

アンブレラ、日本とアメリカ合衆国のジョイントプロジェクト
紙に鉛筆、木炭、布、クレヨン、パステル
1986 年
66.7 x 76.8 cm

アンブレラ、日本とアメリカ合衆国のジョイントプロジェクト
紙に鉛筆、木炭、布、クレヨン、パステル
1986 年
66.7 x 76.8 cm

11
みかわちやき　とりこうろ
三川内焼 鳥香炉
一口 | 磁器
制作年不詳

12
まるやまおうきょ／ごしゅん
円山応挙／呉春
うせつさんすい
雨雪山水
二幅 | 紙本墨画淡彩
江戸時代（18 世紀）

13 *
むさしのずびょうぶ
武蔵野図屏風
八曲一隻 | 紙本金地著色
江戸時代（17 世紀前期）

14 *
司馬江漢／しばこうかん
ふがくず
富嶽図
一幅 | 紙本著色
江戸時代（18 世紀後期）

15
横山大観／よこやまたいかん
かいへんぼうしょくず
海辺曙色図
一幅 | 絹本著色
明治時代（20 世紀前期）

16
多田 美波
超体積 - a
ポリエステル樹脂、真空蒸着メッキ
1978 年
15 x 15 x 15 cm

17（撮影 NG）
エドワード キーンホルツ
ぜいたくな億万長者
金属、レンズ、電球
1976-1977 年
51.5 x 21.8 x 22 cm

18
内倉ひとみ
月の雫
銅に銀メッキ
2017 年
39 x 13 x 13 cm

19
まるやまおうきょ
円山応挙
わかまつつるず
若松鶴図
一幅 | 絹本著色
江戸時代（18 世紀）

20
まるやまおうきょ
円山応挙
せっちゅうえんおうず
雪松鴛鴦図
一幅 | 絹本著色
江戸時代 寛政五年（1793 年）

* マークの作品は裏面に解説があります

21
きのしたおうじゅ
木下応受
かんじょず
官女図
一幅 | 絹本著色
江戸時代（18 世紀後半〜19 世紀前半）

22
せいじとりがたすいちゅう
青磁鳥形水注
一口 | 磁器
高麗時代（10 〜 14 世紀）

23 *
こうえつうたいぼん
光悦謡本（内百番）
版本（古活字本）
江戸時代（17 世紀）

24
奈良 美智
Peaceful Night
セラミック
2018 年
29 x d.18 cm

25
奈良 美智
Thinker
セラミック
2018 年
31x d.19 cm

特別展示室 觀海庵　解説

7-10. クリスト（1935-2020）
「包まれた遊歩道、東京、上野公園のプロジェクト」
「東京ビエンナーレ 人間と物質の間」展（1970年開催）に招待されたクリストは、その前年、ジャンヌ＝クロードと初来日した。そこで日本と欧米の空間意識の違いに興味を持ち、両者を比較するプロジェクトとして、同展の会場館である東京都美術館が位置する上野公園と、ソンスビーク公園（オランダ）を結んだ2部作のプロジェクト「覆われた遊歩道」を発案。同展の出品作品として提案したが、広大な上野公園の遊歩道全体をポリプロピレンの布で覆う壮大なプランは許可が下りず、同展では、美術館の内部を使用した「覆われた床」のプランで参加することになった。この2部作のアイデアは、十数年後に「アンブレラプロジェクト」として全く姿を変えた形で実現した。

「アンブレラ、日本とアメリカ合衆国のジョイントプロジェクト」
日用品を布で包み、紐で縛ることから始まったクリストの「梱包」作品は、パリのポン ヌフやベルリンの旧帝国会議事堂といった建築物を包む大掛かりなプロジェクトへと発展していった。本作は茨城とカリフォルニアを舞台に、それぞれ黄色と青の傘3,100本ずつで覆うプロジェクト実現のためのコラージュである。
クリストは、プロジェクト毎に数多くのドローイングやコラージュを制作し販売し、実現のための膨大な費用を全て自身で賄っていたが、それはクリストによれば、「完全なる自由を手に入れるため」。実現までには環境の調査や行政との交渉等の長い道のりがあるが、最終的に期間限定のパブリック アートとなることで、誰の所有物でもない自由な作品が仕上がり、そして消えていく。撤収した後にもドローイングは残るが、それらは作品そのものではない。作品として残るものがあるとすれば、彼らのインスタレーションを体験した一人一人の中に生まれた心の動きだろう。それは時々、それぞれの心に蘇り、蘇った瞬間だけ作品のリアリティが戻ってくる。

14. 司馬江漢 「冨嶽図」　江戸時代（18世紀）
画面右上の「Sata Fu Dsi」との書き込みと描かれた景色から、静岡の薩唾峠（さったとうげ）からみた富士山を描いたものと思われる。司馬江漢（1747-1818）が油彩画制作に打ち込んでいた時期の作品。江戸に生まれた江漢は、洋風画家として西洋風の銅版画を日本でいち早く手がけたことで知られている。実際の風景を見えたように絵にする面白さが気づかれたのは、江漢が活躍した時期のことだった。遠近法を用いた洋風表現の風景画に、当時の人々は心を動かされたことだろう。古くから霊山として崇拝されてきた富士は、吉祥の画題としても多く描かれた。伝統的な絵画観と近代的感覚との交差する光景ではないだろうか。

13. 「武蔵野図屏風」　江戸時代（17世紀前期）
武蔵野は現在の埼玉〜東京西部、神奈川の一部にまたがる平地。荒涼としてさえぎるものがなく、その野趣に様々な想いをたくした和歌が多く詠まれ、『万葉集』『続古今和歌集』をはじめ、『伊勢物語』にもその名が見える。季節や名所にちなむ景物画は近世初期から描かれ始めるが、そのなかで「武蔵野図」と呼ばれる一連の作品が制作された。本図も古くから歌に詠まれた武蔵野のイメージを描いたものと考えられる。金雲は金箔で表し、左上部の三日月は厚みのある金属をはめて表現している。薄の穂の形や萩の葉の色調にやや形式化が見られるものの、風に吹かれる草花の様子、細く緩やかな曲線を重ねた薄の葉の繊細な描写が、画面の枠を超えて野原の広がりを感じさせ、秋の風情をうつし出している。

23. 「光悦謡本（内百番）」　江戸時代（17世紀）
江戸慶長年間（1596〜1614）には、宮廷や武家、豪商の間で活字による印刷、出版文化が花開いた。本作は角倉素庵（すみのくらそあん）が主動し、木活字で刊行された観世流の謡本。平安時代の唐紙風に植物などをデザイン化した文様を具引紙（胡粉を塗布した紙）に雲母で摺り出した装丁と、2字〜4字をつなげて作った木活字を組む古活字版によって印刷された本阿弥光悦流の書体が美しい。本書は、表紙および本文料紙全てに雲母摺模様のあることから「特製本」と考えられる。